

卷頭言

安黒 務

2014年11月4日～6日、大阪と奈良の県境、生駒山中腹にある関西聖書学院(Kansai Bible Institute)を会場とし、第十四回「日本福音主義神学会全国神学研究会議」が開催された。本号(Ⅰ)と次号(Ⅱ)において、全国研究会議発表者の論稿、またその関連テーマを扱った各部の春期・秋期の神学研究会議の論稿、そして神学会の内外から今テーマに関し執筆力のある研究者の論稿が、編集委員会の意図と目的に沿い選択的に掲載される。つまり『福音主義神学』誌は、「全国研究会議」と足並みを揃えつつ歩むけれども、あくまでも「もうひとつの別個の、独立した存在」である、ということである。

本45号には、「旧約聖書学部門」から津村論文、「新約聖書学部門」から山崎論文と伊藤論文、「組織神学部門」から関野論文、「歴史神学部門」から安黒論文と青木論文、「講演要旨」としてギャンブル講演、最後に「投稿論文」の竹内論文が掲載されている。今回の先生方の論文の一つ一つは、いずれもかなりの内容を擁しており、その中味をひとつひとつ取り出し、それぞれが有している意味と含蓄とを「巻頭言」として抽出することは紙面上困難である。筆者が「これは…」と思うものは多々あるが、それはあくまでも個人的な解釈であり、一面的であることを恐れる。その意味で今会議等の論文に対しては、特定の視点からの評価を控え「論文自身をして語らしむる」というのが最善と考える。

■シナイ山の麓において「十戒の二枚の石の板と幕屋」を与えられ

さて、本テーマにおいて、我々は一体何を取り扱おうとしているのか。全国研究会議の「主題一趣旨説明」において、その準備委員の滝浦滋氏は、「日本福音主義神学会は、1970年4月に、聖書の十全靈感を信じる福音主義キリスト教の立場に立つことを共通の教義とし…」という言葉をもって始められ、「軸となる聖書信仰についての揺れ」が、今回の全国研究会議の「中心課題」であることを明示された。戦後、多種多様な教派がバラバラで宣教と神学活動を再開す

るただ中で、「日本福音同盟」や「日本福音主義神学会」は設立された。それは、ちょうど十の災害と小羊の血によってエジプトの桎梏から解放された「烏合の衆」が、シナイ山の麓において「十戒の二枚の石の板と幕屋」を与えられ、その「秩序」のもとに荒野を旅したことに類比される。日本福音主義神学会は先年「創立四十周年記念号」を刊行し、ひとつの節目を刻んだ。神の民が四十年間の「荒野の時代」を経た後、「約束の地」の対岸に立ったように、我々は今「新しい時代状況」を目の前にして福音主義の立場に立って神学の研鑽活動に動いている。しかし、福音主義者にとって、この「新しい時代状況」とは一体何なのか。この時代における「主要な争点」とは何なのか。そして我々はこの時代の争点をどのように受けとめ、どのような「新しい福音主義的ガイドライン」をもって神学の研鑽に動いむべきなのか。これらの根本的な課題を直視し、正面から取り扱い、明確な方向性を示す。これが全国研究会議の負った責務であった。これらの責務は果たされたのか—その評価は全国研究会議への参加者、その記録であるBD-R 視聴者、そして本神学誌読者に委ねたい。

ともかくにも、我々は、主がヨシュアに「このヨルダン川を渡り、わたしがイスラエルの人々に与えようとしている地に行け」（ヨシュア記 1:2）と言われ、シナイ山で受け取った「十戒の二枚の石の板」が納められた「主の契約の箱をかつぐ祭司たちがヨルダン川の真ん中のかわいた地にしっかりと立つうちに」（ヨシュア記 3:17）民はすべてヨルダン川を渡り終わったと記されているごとく、「聖書の十全靈感を信じる福音主義キリスト教の立場」を掲げつつ「新しい時代状況」の地に侵入し、先住する「争点」ときちんと向き合うための「福音主義的ガイドライン」を明らかにせんとしたのである。

■ヨルダン川の川底を一年間渡り続けた

会議のスタイルは、所属教派の立場を「安全」に代弁する「モノローグ」スタイルではなく、「生の声」で語りかけ、果敢に方向性を示す「ディスカッション」のスタイルを講演者に期待した。それで、①三分野の「講演者」に早期にそれぞれの分野の今日の状況・動向・争点のパースペクティブとエッセンスを、②「応答者」に専門の視点からその提示された材料の分析・評価を、③「争点発題者」に提示された争点を分科会単位でさらに深く掘り下げ、きめの細かい

ディスカッションの只中へ参加者を導き入れることを、そして最後に④「パネル・ディスカッションの司会兼全体総括者」に三部門の議論を総括し福音主義の未来に向けてのガイドラインを提示することを求めた。

以上のように、会議のプログラム全体が討論的なフレームワークで構成されていることから、「会議当日」に当事者中心になされる「ディスカッション」は、講演者に「講演依頼がなされた日」をもって「プレ会議」として始まったと言ってよい。半年が過ぎると、「基調講演者」から提出されたそれぞれの簡易レジメを基に、「応答者」「争点発題者」にも簡易レジメ提出を求めた。簡易レジメは提出後ただちにネット上に一般公開され、「全国研究会議でなされる当日のディスカッション」はベールを脱ぎ始めた。以後、JETS ホームページへのアクセス数は急増していった。JETS ホームページ閲覧者もまた「ネット上ですでに開催されている講演者同士のプレ会議」に参加を始めたのだ。三ヶ月前になると諸講演者から詳細版レジメが届き始めた。そのとき、講演者の詳細レジメの内容の広さ、長さ、高さ、深さと講演者相互の関係性の豊かさから、三日間の会議全体の「連続性」「漸進性」「有機的一体性」を確信した。「総括者」には、簡易版と詳細版のレジメを基に、まだ会議が始まっていない段階で「三日間のディスカッションのシミュレーション」をお願いし「総括&ガイドライン」を提示していただいた。申込は殺到し、会場の快適さを保持しうる限界数を超える危険を感じ、最後には、勧誘を抑制してくださるよう、お願いせざるを得なかった。

我々は皆、「半年先、一年先に、主がなされるであろう」ことを望み見て、それが「すでに現実である」かのように受けとめ、寝ても覚めてもそのシミュレーションの中に生活した。「我々が置かれているのは如何なる状況なのか」、「我々が直面しているのは如何なる争点なのか」、そして「我々はそれらの課題を直視し如何なるガイドラインをもって前進すべきなのか」を、会議に先立つ一年間問い続けた。我々はある意味で、ヨルダン川の川底を一年間渡り続けたのである。講演者は祭司たちのように契約の箱をかついでヨルダン川の川底の真ん中に立ち続けてくださった。

■「契約の箱」は我々のど真ん中に

四十年前、日本福音主義神学会は多種多様な教派の神学徒を結集し、「聖書の十全靈感を信じる福音主義キリスト教の立場に立つことを共通の教義」として誕生した。聖書観に関しては、保守的な立場と革新的な立場の間に多様性が増し加わってきた。このことは、隔離された荒野生活と先住民のいるカナンの地というコンテクストの変化も大きく影響している。荒野での戦い方と約束の地での戦い方には大きな相違があつて然るべきである。しかし、ひとつ変わらないこと、変わってはならないことがある。そう、つまり筆者の言わんとすることはこれである。「神への畏れ」「神のことばへの畏れ」は、ヨシュアの時代と同様、「契約の箱」のように我々のど真ん中であつて然るべきである。もしそれが保持できなければ、我々は神の裁きを身に招くことになるであろう、ことである。

■付記

尚、これらの全国研究会議の諸講演の簡易・詳細レジメは、JETS 公式ホームページに掲載 (PW: jets) されており、その「生の声」は、本神学誌とともに、もうひとつの「記念の石」(ヨシュア記4:3) として BD-R に収録・販売されている (問い合わせ・申し込み先:「一宮基督教研究所」 Mail: aguro@mth.biglobe.ne.jp)。

(第十四回「日本福音主義神学会全国神学研究会議」準備委員長)